俺の命って結構軽い！！

ミヤチーモトキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の命って結構軽い！！

【Nコード】

N9775U

【作者名】

ミヤチーモトキ

【あらすじ】

おそらく人類で初、二回三途の川を渡りかけ、強靱なる生命力でその二回とも無事生還した俺こと理一悟はついに死んだ。でも生き返った。そこから俺の頭を抱える日々は始まった。

10月2日 更新停止

練り直しが完了しましたら、また更新はじめます。いつになることやら……………。

これはどういふことですか?? (前書き)

はじめまして。ミヤチーモトキという者です。

よろしく願います。

感想・評価・批評・誤字脱字の発見などしてもらえたら幸いです。

10月2日 話の練り直しをしたので、更新を停止させていた
だいております。

「これはどういふことですか??」

「ここは何処だ?」

ついさつき目覚めたばかりのボサボサ天パ男子高校生、理一悟と俺は周りを見渡しそう呟いた。

俺は別に記憶喪失という深刻な状況には陥ってはいない。

その証拠に俺は「二日前の夕食、何食べた」という脳トレ的質問に「各種調味料をふんだんに使ったカレーライス!!」と即答できる。だが思い出せないことはある。

それは登校中、自分が何をやったかということだった。

「さっぱりだなー」

なんか出てきそうでてこない。

テストで直前まで覚えていた有名な偉人を思い出せないひつかりに似ている。それを思い出せれば自分が今おかれている状況……

……赤い荒野に自分一人という状況が幾分か理解できるのだろう。……多分。

俺は少し考え、もう一度回りを見渡す。

枯れた木が数本、自分の二倍ぐらいの岩が数個、赤い大地という景色は変わらない。

時間さえもわからない。畜生、参った。

意味不明だ、ありえない、どうなっているんだ、と一般人なら思うだろう。

俺も最初そう感じた。だが次に出了た言葉が「まあ考えても仕方がない」という言葉だったのはちょっと一般よりずれているからだろう。なぜなら俺は……二度、三途の川を渡りかけたことがあるからだ。すごかった。いろんな意味で。

一度目は工事現場の鉄骨が落ちてきて意識不明の重体になった時。二度目は医者がさじを投げる程の不治の病にかかった時だ。

そんな事があったから今の楽観的発言、および思考がある。別に

自慢するわけじゃないんだけどね。

「あゝなんかあの時と似てるな」

俺は自分のボサボサ頭をかきながら呟く。

あの時とはもちろん三途の川を渡りかけた時の事だ。

うえ、我ながら嫌な事思い出しちゃった。

ため息をつきながら露骨に嫌な顔をする。

本当に嫌なのだ。あんな事を思い出すのは。絶対絶対絶対に「絶対的に!!!」

自分に思い出さないよう暗示をかける。

数分「思い出すな思い出すな思い出すな」と誰かに呪いをかけるように声に出し、最後の方には「ぶたちんこおっぱいぶたちんこおっぱいぶたちんこおっぱいぶたちんこおっぱい」とぶつぶつ呟いてしまっていた。

自己流の雑念を雑念でかき消すという荒業で強引にトラウマから抜け出した俺は立ち上がってカッターシャツについた砂を手ではたき落とし、体操を始める。

「やっぱ寝起きだからな。体伸ばしとかないな」

一人ごとを呟いたのは癖のようなものでもあったが先ほどのトラウマ対処というほうが今はしっくりくるだろう。

「まずは手を上から下へ背伸びの運動」

やっている体操は小学生の夏休みに、だれもが避けては通れぬ道。ラジオ体操第一だ。

始めてから三分後、ラジオ体操第一が終盤あたりに突入した時、ガサツと自分の後方の岩のかけから音がした。何かを引きずるような不気味な音が。おそろおそろ完全にひけ腰で岩の陰を覗いてみるとそこには……地面を這いつくばる少女がいた。

俺はまず自分の目を疑った。なので目を正常に戻すべく、両手をぐーにして両目をかき、その後、目を空に向かって見開いた。10秒もたずに涙が目に溜まる俺はどうやらドライアイのようだ。

よし、これで俺の目も正常に戻ったから、まさかの行き倒れ少女

なんて見えやしないだろう。

そう決め付け覗いた岩の陰には……呻き声を上げる少女がいた。

「肉を………血を」

俺は次に自分の頭を疑った。なので頭を正常に戻すべく、両手で岩を掴み躊躇無く頭をぶつけた。その瞬間、傷は空に向かって開いていた。10秒ももたずにふらつく俺はどうやら出血多量のようなのだ。

よし、命も懸けたことだし、まさかの血液懇願少女なんて見えやしないだろう。そう結論付けて覗いた岩の陰には……俺の顔の血を見て、目を輝かせる少女がいた。

「血だ血だ、血液だ、A B型だ！」

なぜ血液型がわかった!? あーもう駄目だ!! 俺の体の故障の所為にしきれない。この血液を見て興奮冷めやらぬ少女をリアルと認めざるおえない。でもこんなの認めたら一般人としてどうなの? ねえ? ていうか俺一般人より少しずれてたんだっただ。もう認めるとしよう。三途の川だってあるんだし。

まあだからといって、体は別に特殊じゃないんですよ。

すなわちこの頭からとめどなく流れ落ちる血は危険信号なんです。

途端、目の前が真っ白になった。

だが倒れていく感覚はあった。それを俺はどうすれば回避できるかわからない。

そしてまた俺の意識は無くなった。

リアクションって大事。芸人じゃなくても大事。

「おい」

俺は今暗闇の中にいる。

「おゝい」

確か血が出すぎて倒れたんだ。

「おきろ〜」

何かに揺すられている気がする。

「えいつ！」

だが何かが変わる気配も人の気配も無い。

「えいつ！ ……えいつ！」

俺はこのまま暗闇の中にとりのこ「ていつ！」

俺はこのまま暗闇の中にとりのこ「せいっ！」

俺はこの「てりや〜！」

「うるせー！ さっきから人の頬を多様な言葉とともに引っ張るな！」

叫んでしまった。だが俺は叫んだ瞬間に「うおっ！？」と飛び退いて後方の岩に頭をぶつける。女の子の顔が目の前にあったからだ。痛い！めっちゃ痛い！

「やっと起きた」

俺の顔を覗き込むように見ていた少女はそう言った。

なんだこいつ。てかこいつ倒れてたんじゃ？

「お前、誰だよ」

立ち上がり、頭を手で抑えながら乱暴に尋ねる。

うわっ！？俺の頭、血がついてんじゃん！？

「介抱してあげたのにあんた、なんか失礼ね」

ジト目で睨まれた俺は少しうるたえる。小心者なんだ俺は。悪いか！

「何言ってるんだお前？」

倒れてたのお前だろ？

遭難してた少

女に助けられるなんてへま、俺はやらかさない。女の子に頼るのは、幼馴染に学校の日に起こしてもらったり、宿題を見せてもらったり、勉強教えてもらったり、ご飯作ってもらったり、掃除やってもらったり、洗濯やってもらったり、その他もろもろの事だけだ！」

「今の言葉は、あんたの人間性を理解するには十分すぎるわね」
ジト目がさらにジト〜としたものになった。

あれ、なんか俺まずいこと言った？

なんにしても俺をそんな目で見ないでほしい！それは情けない男を見つけたときに使ってくれ！今は目の前にいるのは容姿端麗、頭脳明晰、理一悟様だ！！ ……ん？

そこで俺は何かに気づく。それは彼女の頭の両サイドに角（右は半分折れて平ら）がついていた事だ。コスプレ？

疑問に思った俺は

「頭に何つけてんだ？ コスプレ？」馬鹿みたいな質問をしてしまった。

「なっ！ これは生まれつきよ！ う・ま・れ・つ・き」

「おなかから出てきたときに、付属品としてついてたのか」

「言い方！」

「オプシヨン」

「変化が無い！！」

少女は手をぶんぶん振りながら地団駄を踏み出した。

「えっ！ じゃそれ頭から生えてんの！？」

「そう言っただけでしょ！ 最初から！」

「とすると、あなた様は鬼とかそういう類の生物でよろしいんで？」
「さいますしうか？」

「そうよ、やっとわかったのね」

さらっと驚くべき己の正体を認めた。女の子は誇らしげに仁王立ちし、無い胸を張る。

「へえ〜、ホントにいるもんなんだな」

「えっ！ それだけ！？」

俺がぼけたわけでもないのに女の子はこけそうになりながらそう言う。

「なにがだよ？」

「いやもうちょよつと驚いたりしないの？」

俺としては十分なリアクションだったが、どうやら女の子はそのリアクションが不審らしい。

目を丸くしながらも俺があまり驚かないことにショックを受ける女の子。

「いや、別に慣れてるし」

「そ、そう」

俺の素っ気無い返答に肩を落とす。

俺にとって鬼とは昔人々が様々な恐怖から生み出した空想上の生き物などしか思っていなかったが、それが今ここに存在しているということとは文字どおり恐怖を生み出すのдарう。だが相手が俺だったことによりあまり怖がられなかった。それどころか驚いてさえももらえなかった。そんな事実には彼女のプライドは少なからず傷つけてしまったようだ。鬼といっても見た目通りのデリケートな女の子なわけだし、少し罪悪感を感じる。

なので俺は一度目を閉じ、深呼吸をして、

「すう〜はあ〜」

一度閉じた目をカッと見開き

「ええーーーーー！鬼なのーーーーー！」

ファーストリアクションをやり直すことにした。

「鬼なんて初めて見た！マジすっげえー！」

物凄い驚いている事を表す為に大きな声に加え、両手を上げ体のけ反らせる。

「え、何？」

「鬼つてすっげえ！ マジ半端ねえ！ めっちゃかっけ〜！
角ついでるからめっちゃ強そう！ 岩とか軽々に粉碎出来そう

！ 鬼だけに鬼かっけ〜！」
思い付くだけの褒め言葉を並べる。

「え？ え？」

少女は対応に困っているのか中途半端に手を胸の高さくらいに上げ、口をポカンと開けている。構わず俺は続けた。

「どのくらいカッコイイかっていうと、ハーフの目の色が5ポイントとして、鬼は200ポイントくらい」

あれ、俺何言ってるんだ？

「何が200ポイント？」

不思議そうに尋ねられた。俺もわからない。

説明する方、される方、自他共に話の内容が把握出来ていない。

「これじゃわからない？ それじゃわかりやすく車で例えよう」

やばい！ 自分で例えるとか言っておいてなんだか俺の車に対しての知識は乏しい。例えることなんて到底出来るはずがない。

自分の思考回路の暴走に今更ながら気づく。だが暴走は

「う〜んとね」

気づいたところで止まらない。

俺は即座に諦め、暴走に身を任せる。理由はめんどくさいから。

「何よ？」

「そうだそうだ！ あれだあれ、あの〜何だっけ、あそこら辺のそこからこうなったところ」

俺は自分のボキャブラリーの少なさを呪った。まさか車の情報など一欠けらも出ず、全て指示語で表現するとは……己の暴走恐るべき威力だ。

「何？ 意味不明？」

重々承知しております。

「だからあそこら辺のそこからこうなったところ」

暴走はまだまだ続く。

「だから何？」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「ホント意味不明！」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「あんた、あたしと真面目に会話する気ある？」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「ないわけね」

暴走状態の俺の指示語一点張りに呆れてため息をつく少女。

「はあ」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「ため息まで反応すんじゃないわよ！」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「うるさい！」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「あゝもう！」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「あんたはあそこら辺のそこからこうな「あそこら辺のそこから」

うなったところ」

「あたしの言葉にかぶせんじじゃないわよ！」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

「黙れ！」

「あそこら辺のそこからこうなったところ」

鬼さんはツッコミをいれるんじゃないやなくて暴走を止めていただきた
い。

いつまでこの無限ループが続くのだろうか。

想像と現実の違い、そのギャップを楽しもう！

10分ほど続いた暴走状態の俺と少女の戦は唐突に終戦をむかえた。

結果は

「あそこら辺のそこからこうなゴフツ!?」

鳩尾に一発喰らった俺の無条件降伏。俺、情けない。

「暴走してて止めてあげたんだから感謝しなさい」

「ゴホツ！ありがゴホツゴホツ！ありがとう」

暴走も止めて、呼吸も止まり、呼吸困難に陥った。まさに一石二鳥……違うか。

「どういたしました」

ありがとうに嫌味をこめて言ったつもりだったが爽やかにかえされてしまった。クソツ！素直でいい子だ。

俺は頭の中で殴られた仕返しをすべく、少女のなるべく嫌がりそうなあだ名を考える。

口には出さないよ。出したら殴られそうだし。

やはりオーソドックスに鬼女としておくべきか。ストレートなあだ名は結構効果抜群なのだ。……でも捻りがない。うゝむ。……

…あっ！じゃあ鬼（ ）っていうのはどうだろうか。

なんかドラ○エのモンスターみたいでもいいかもしれない。……

でもあだ名で呼ぶ時に『鬼かつこ雌かつこ閉じる』じゃ長ったらしい。

再度忠告するけどこのあだ名は決して使わないよ。あくまで頭の中だけ。

なぜかって？ 何度も言わせないでほしい。怖いからさ。

もうめんどくさいから鬼ババでいいかな。

そう考えながらも俺はあだ名になるものはないか少女をつま先から、頭のとっぺんまで眺める。

この際「変態、セクハラ」と言われているのは無視しよう。

足はスラッとのびている。ヒップは細い。ウエストも細い。バストも細い。男性の胸囲、チエストと呼ぶべきか迷った。

総じてキュッキュッキュツキュツといった体型だ。

窓拭きの効果音みたい。

あだ名、窓拭きランクイン。

顔は………まあ、かわいいの部類に入るだろう。

いや……結構かわいい。

とてもかわいい。

超絶にかわいい！！

勝ち気そうで大きな瞳

さっきのやり取りで少し汗をかいた首筋に張り付いた赤色の髪

「変態、セクハラ」と俺をけなしている口から覗く八重歯

胸は物足りないがしかし、胸が物足りない！貧乳はステータスであり国宝級だという考えならば全てが輝いている。

鬼女、鬼（ ）なんてぞんざいな言い方、鬼ババなんて以つての外である。

美少女だ。

そしてその口からは

「変態、セクハラ」という罵りが終わり、「血をくれ」なんてかわいい顔立ちから想像もできないギャップに満ち溢れた言葉が出てきちゃって、もうなんか初対面で心が揺らぎまくる。

「なあくれよ」

その物欲しげの目もいい。

「なあなあ」

その猫撫で声もいい。

「聞いてんの？」

その不機嫌そうな表情もいい。

「いただきます」

いただきますって一体何をいただくんだい？

あつ！そうか、血をくれって言ってたから血の事か。じゃ誰のを

.....

「はっ！！！」

そこで俺は気づき、同時に後悔する。血をくれと言った時点で即座に逃げなかったことを、こんな鬼に見とれてしまった事を、心が揺らいでしまった事を。だがもう遅い。

鬼（美少女）はおてのしわとしわを合わせる食事前のあいさつをしつかり済ませ、静かに目を光らせている。その目は俺に恐怖しか与えてこない。

体の全神経に集中する。

いつでも飛び掛かってきた時、対応できるように。

少女はそんな俺をよそに口だけフツと笑い、

俺は意味がわからなかった。

気づけば俺の手は握られていた。

手を振り回して逃げようとするが、彼女の強力な握力によって阻止される。

そして少女は凶悪な笑みを浮かべ、

俺の腕に、

布に染み込ませたアルコールを塗り、注射器をさした。

「へっ？」

想像していた痛みより明らかに小さい痛みに思わずアホみたいな声をだしてしまう。

鬼は注射器の後ろ部分を引き、血を採取している。

注射器の中がいつぱいになるとその血を瓶に移した。その後、腰に手を当て、風呂上がりの牛乳のように飲み干した。

「ぷはあ〜」

盛大な飲みっぷり。

「やっぱ、疲れた後の一杯はうまい！」

なんかサラリーマンみたいなのを言っている。こんな生き生きとし、人間味に溢れた鬼を見ると俺の鬼というイメージは簡単に崩れていった。

「あのー、聞いてよろしいでしょうか？」

「んっ？ 何？」

「お前、鬼なんですよね？」

今更の確認だが警戒心がまったくなくなった俺はそんな事を尋ねた。

「だから見てわかんないの？ 今の食べ方とか」

むしろそこなんだよ。お前を疑う余地があるとすれば。

「いや、そこがひっかかるんだよ。もっと鬼ってなんか人間をいたぶるとか殺すとかそういうイメージを持ってたから」

「そういう風に血をとって欲しかったの？」

「いえ全然」

自分の食され方の希望をしたわけではない。

俺は少し身構える。

「冗談よ、冗談」

なら残忍な笑みが一瞬見えたのも冗談の演技ですよ？

「あんたの言ってる食べ方は時代遅れ」

「時代遅れ！？ 食べ方に主流なんてあんの！？」

人間の食べ方に流行があるなんて……………少し怒りを覚える。

「そつ。その食べ方は食べ終わった後、血が至る所について小さい子がミートソーススパゲティを食べたみたいになるから嫌なの」「殺伐とした光景をそんな微笑ましい例えにされても反応に困る。

「上の連中とかがあんだの言ってる食べ方やってる奴もいるけど、少数ね。最近のブームはお酒のおつまみって聞いた」

その上の連中ってというのはもう人間は主食ではないらしい。喜ぶべきことだが、何か複雑で微妙だ。

この少女にしゃべらせておくと、鬼に対しての恐怖がなくなっていく感じがする。

「そーいやここどこ？」

最初にするべき質問だが前述の通り警戒心がまったくないのでそこは許してほしい。

「ここ？ ここはね……………ちょっと待って。GPSで調べるから」少女はそう言いながら、指をパチンツと鳴らした。

すると魔法でも使ったように赤い携帯電話のような物が出てきた。もう「なんでそんな物もってんの？」とか「どうやって出したの？」なんて質問はしないでおこつ。

俺の中の鬼のイメージはこれ以上崩したくない。

だがそんな事もつゆ知らず、少女は鬼のイメージ解体作業に取り掛かる。

詳しくいえば、取り出したGPSをうまく使えなくて「あーもうこれどうすんだっけ」とか「やっぱ使いにくい」とか文句たれてるのだ。

鬼が現代科学の進歩についていけてない光景。シユールでなかなか面白い。

もう鬼ってというのは恐くない。むしろ愛らしい

その愛玩美少女鬼は

「出た出た、地図」

何て言った。どうやらやっと地図が出たらしい。

しかし一言発したきりしゃべらなくなった。

そして画面を見ながら、右に歩きだした。

「ちよっ!？」 俺の質問は？」

「待ってて。仕事済ませてくるから」

少しだるそうにこたえる。

仕事？ バイトか何かをやっているらしい発言だ。その言葉か

らすると、一応こちらにも街か何かがあると推測できる。まあここ

らといってもこの少女は倒れていた。すなわちそうとう遠くだろう。

でもそんな遠くまで行かされる仕事とはどんなものだろうか？

そんな事を考えていて気がつくのと遠くに見えていた少女の背中に

小走りで駆け寄る。

「ん？ あんたついてくんの？」

ちらつとこちらを見ながら言われる。

「そりやまあ……結構不安なんで」

「男のくせに」

声色に明らかかな軽蔑を感じ取った俺は反論を試みる。

「馬鹿にしてもらっちゃ困りますよ。わたくし理一悟は鬼と数分会

話ただけで人間の鬼に対して持っていた恐怖を物の見事に乗り越

えてしまいました。」

「あんた悟ていう名前なのね……てかそれあたしを馬鹿にしてるよ

うに聞こえるんだけど？」

立ち止まり、眉をつりあげ睨まれてしまった。

さりげなく自己紹介できたところは自分で自分に拍手を送りたい

ぐらいなのに。でも謝っておこう。

「ごめんなさい。調子に乗りすぎました。でも怒らないで。かわい

い顔が台なしですよ」

軽く場を和ませる為に言ってみた。

しかし、少女の顔はみるみる赤くなっていき「なっ、何言ってる

のよ」と言っすすぐにGPSの方を向き直って速歩きで歩き始めた。

うん

何か……………ピュアだ。

さっきから乱暴な言葉使いたが中身はかわいいと言われると照れてしまうほど純情可憐。

冗談の一つとして受け取ってくれくばよいものを。(かわいいのは冗談ではないが)

なんかやりにくい。

それから15分程度沈黙が続いた。

カラオケでカウンターに置いてあったタンバリン持ってきたのはいいけど、実際

一人の男と一匹の鬼の足音が、周囲が静かなこともあり妙に大きく聞こえる。そしてそれに耐えられなくなった俺は仕切り直しもかねて「そういえば名前、聞いてなかったな」と自己紹介を促してみた。

少女はこちらの方を向かずに「キイナよ、キイナ」と答えた。

顔は窺えなかったが、声色から照れていないことがわかった。やっと気まずい雰囲気から抜け出せる。安心安心。

そうして次の言葉を紡ごうとした時、

「ねえあんた」

と遮らてしまった。

「俺とお前しかいないからあんたっていうのが俺を指しているのは分かるけど、使うなら使うでせめて俺の方を向きながらそういう代名詞は使ってくれ」

少し嫌味を言うような言い方で、遠回しに人の顔を見ながら話さないで失礼、と俺は言いたいのだ。

それに対してキイナはジロリとこちらを見て「あんたってめんどくさいわね」と不機嫌になる。

「よく言われます」

あくまで好青年の様に笑顔で頭をかきながらかえしてみる。

「本当にめんどくさいわね……わかったわよ」

不満の色は見えるものの素直だ。さすが。

「え〜と、リーチ？」

微妙にイントネーションが違う。首をかしげながら確認するように呟く姿はかわいいが間違いはきちんと正そう。

「うんそれはビンゴの時のリーチであって、俺の名前はリ・い・ちです」

「悟でいいでしょ？」

「うん、俺の説明は無駄だったようだね」

清々しく無視された事に悲しい反面、いきなり下の名前で呼ばれて嬉しさを感じるのは相手がかわいかったからであろう。

「悟はどうやってここにきたわけ？」

「そういえば俺の一番の疑問はそれだったな。すっかり忘れてた。」

「それが、よくわかんねえんだよ」

厄介事を思い出し、髪を手でぐちゃぐちゃにしながら俺は答えた。

「え？ 自分の生きてた時のこと忘れたの？」

「は？」

俺はキイナの一言の意味がわからなかった。

なんだろうか、物凄い違和感があったのは確かだ。

もう一度キイナの発言を反芻するしよう。

『え？ 自分の生きてた時のこと忘れたの？』

「ハハツ、俺が死んだような言い方だな」

悪い冗談はやめてよと言わんばかりのひきつった笑顔で呟いた。

「死んだような言い方って……あんた死んでるからここにいるんじゃない」

俺には血が氷水になったような錯覚と衝撃、そして背中に冷汗を感じた。

「死んだわけねえだろ！ 死んでるなら三途の川をわたってる筈だ！！」

これまで二度、死にかけて三途の川を見た。そしてどちらからも生還した。それなのに三途の川を見ずに死ぬなんてありえない。今までの体験からキイナの言っている事を全力で否定する俺。

「三途の川を渡らずにここに来たの!？」

立ち止まり目を真ん丸にして物凄い驚かれた。

「そっだ！」

「でもあんたの頭の上にあるわっか」

そう言いながら、俺の頭をUFOを見つけた様に指差した。

「わっか？」

俺は頭の上を手探りする。でも何も無い。

「何もないじゃねえか」

「もつと上よ」

もつと上？

もう一度頭の上を手探りで確認する。さっきより少し上の方を。

と、そこで何か手が当たった。

それを指でつつき、噛み付かないか確認する。

「噛み付きやしないわよ」

俺の不安を読み取り、呆れた様に告げるキイナ。

「う、うるせー！　噛み付かなくても鋭利な刃物だったらどうす

んだよ！！　例えば丸ノコとか」

「なんで頭部に丸ノコつけなきゃなんないのよ！　どういう用途

！？」

「いいや、丸ノコかなにかだ」

俺は頭上の物体の側面をなぞり、その手を見た。

「ほーら、やつぱり丸ノコだ。その証拠に手から血が出て……ない

！？」　えつとそれじゃあれだあれ。えつと、えーと」

頭を両手で掻きむしりながら、円形でひらべったく、真ん中に穴

が空いた物を連想させる。

それを見て「呆れた」とキイナは呟いた。

「あんたまだ信じれないの、あんたは死んー」

「あーあー聴こえないー」

俺は耳を塞ぎながら叫ぶ。なんか不穏な単語をキイナが言いかけ

たようだけどそれは空耳だ。

円形の物、円形の物、円形の物、円形の物、円形の物とぐるぐる

自分の知る限りの円形の物が頭の中に浮かんで消える。

とそこで俺はわかってしまった。その考えは雷のように深く自分

の頭の中で響いた残酷な真実。

自分では薄々気づいていたのだ。だがその真実から目を逸らして

いただけ。

この感触からしてあれしかない。

「わかったよ、俺」

立ち上がりながらそう呟いた俺の声は無意識の内に震えていた。

「やっとわかったのね」

やれやれと溜め息をつくキイナ。

俺はやつと真実を受け止める覚悟ができた。

キイナも察してくれたのか真剣な眼差した。

「これは……」

この後に続く言葉を言い淀んでしまう。

だがこの真実を認めなければ自分は前には進めない。一生逃げ続ける事になるだろう。

沈黙が支配しているこの空間で、俺は拳を握りしめ、言葉を放つ。

「タンバリンだ」

「わかってないわね」

盛大なため息。

ため息すんじゃないわね！

俺の持論は完璧だ。

「俺は通学途中、カラオケ屋のバイト店員に直感であいつはできるとか思われていきなり手刀でスパンツとやられたんだ。んでそのまま拉致。最終的には頭にタンバリンをつけられたんだ。」

ジト目で「理由は？」と半ば諦めた声で質問してくるキイナ。

「理由は単純明快！カラオケのタンバリン要員が足りなかったんだ」

「はあ？」

そんな死んだ魚を見るような蔑んだ目でこっちを見るな。

「ふふ、神様も粋な事しやがるぜ。まさかこんな仕打ちをするとはな。だが俺は負けない！　しっかりタンバリン要員としてカラオケに来たお客様を楽しませ、女の子にウキウキモテモテサクセスストーリーを歩んでやるぜ。」

キララツと言わんばかりに指を天に突き立てる。

「キララツ」

自分でいつちやった。寒すぎる。

あ、あれ！？　そこで拳を握り締めプルプル震えないで下さいまし！　キイナ氏！　その震えは持っていたGPSのバイブ機能だと信じたい。握り締める拳に関しては、……………愛の鉄拳制裁という表現以上にやわらかい表現が見つからない。やわらかいといっても痛みを伴うことには変わりはないが。

もっと自由に、もっと広がり羽ばたけ、俺の想像力！と脳をフル回転させてみてはしたものの……………うん無理です。

どう解釈しても痛みを伴わない表現がない。だから考えた想像が現実にならないよう話を続けよう。そうだ、それがいい。

「だってそれしかありえねえだろ！」

「逆になんでそれしかありえないの！　馬鹿？」

「見てろ！　これを叩けば綺麗な鈴の音が鳴るんだからな！」

「そんな凹凸のないタンバリンなんてあるわけないじゃない！」

語気がさらに強くなるキイナのツッコミを無視し、物体を叩く。すると鈴の音など鳴るわけもなく、代わりに金属を叩いたような鋭い音が響いた。

「……………」

数十秒の沈黙の後、キイナは告げる。

「タンバリンじゃー！」

「トライアングルだ！」

右手をグーにして左の手の平にポンと乗せ叩いた。

「もう円じゃなくなってるじゃない」

またまたため息をつくキイナ。だからため息すんな！

「トライアングルは自分から光を放ってるんですか？」

小馬鹿にしたように（実際馬鹿にしてる）問い掛けられた。これ光ってんのか！

「ならこれは円形の白熱灯だ」

「電源は？」

「俺の脳からでる微弱な電気信号」

「現代科学は脳の電気信号を活用できる程の進歩はとげてないわよ！！」
科学を真つ向から否定したような言い方だ。GPSも満足に操作できてなかったくせに。

「じゃこれはなんだっていうんだよ！！」

俺は強い口調で言った。

すると

ブチッ

なにかがキレたような音が聞こえた。それは間違いなくキイナの
もの。

握り締めている。

何をつて？

拳なんかじゃないよ。拳ってというのはまだ助かる見込みがあるだ
ろつ。

今、握り締められているのは人を殺めるのに十分な重量と硬度を
持つ金棒さ。初めて見た。

「おい！ そんなもん何処からだしたんだよ！？」

今だ、今こそ羽ばたけ俺の想像力！！

自分の命に関わる事だからなのか、頭が先程までとは比べものに
ならない程、回転する。

お！なんか……………金棒がみるみる内にマシユマロに！そしてあ
の武器の殺傷力をより確かなものにしていたトゲトゲがクラッカー
に、……………見えなかった。

「あんだ閻魔大王の所行つてきなさい」

「自分で行つてくるんで大丈夫ですよ！！」

「ここからじゃ遠い。ワープさせる」

先程とは打って変わって抑揚の無い声でそう言って、キイナは焦
る俺を追い詰めるがの如くに金棒を振り上げる。

「ワープってというのはまず金棒振り上げるんでしょうか！？」

コクンとかわいらしくうなずく。畜生、かわいい。

「じゃ証明してくれ！それがワープの正しい手順だということをして意識を飛ばさないということをして！」

大声で叫ばずにはいられなかった。情けないかもしれないがこれが一番の安全策だ。この頭のいっちゃってる子を説得させるには武力じゃない！ 会話、それしかない！

理科の実験結果で他の班と極端に違うととてもない焦燥感にかられる。

「証明さえすればあんたは正座で静かに座ってぶん殴られるのね？」

「ぶん殴るっていつてんじねえか！！」

「物の例えよ」

「金棒の本来の用途がぶん殴るための物なんだよ！全然物の例えなんかじゃないんだよ！！」

ダメだ、活路が見えない。むしろ追い込まてる。どうすれば！？

「この岩を見てなさい」

そんな俺をよそにキイナは近場の赤い岩を指差した。

「この岩、ちょうど頭一個分くらいあんたより大きいわよね」

確かに。だがそれがどうしたっていうんだ。

「なんか関係あんのか？」

「ひ・み・つ」（ウインク）

かわいくない！！

いや前言撤回、かわいい。

「かわいくねえんだよ！！」

嘘をついてしまった。

「はあ？」

「ごめん」

金棒がピクツと動いたのを見て、反射的に謝ってしまう。

「でもちゃんと説明しろ！！」

「これをあたしが金棒でぶん殴ってワープさせる。以上。質問はな
いわね」

「はい！はいはいはい！挙手してまゝす！全力で挙手してまゝす！
」

俺は全力で右手を挙げる。

このまま意味の分からないワープ実験されてたまるか。第一、こいつ岩が粉々に粉碎してもワープだって言い張りそうだ。そこから辺明確にさせとかなきゃ。

「どついうことになったらワープだと言い切れるんだ？」

「岩が消えたらワープしたってことよ」

よかった。ちゃんとした答えが出された。

「じゃ、いくわよ」

よしよし、これで岩が粉碎して終わり。

「うおりゃー！！」

少女とは思えない叫びをあげ、金棒を思いっきり振り抜いた。直後岩は当然のごとく粉々に砕けちる。岩が破壊されたことで発生した風と、とんでくる砕けた細かなつぶてが俺目掛けて飛んできた。

俺は思わず顔を腕でクロスして覆う。

少し待って、腕の隙間からおそろおそろのぞいてみると、そこには粉々になった岩の残骸と、それを前にして残心の状態で静止するキイナが見えた。

その光景は俺に助かったという安堵とうすら寒い何かを生み出していた。深くは追求しないでおこう。助かったのだから。

俺はフウとため息をつき、構えていた腕を下ろす。

がしかし、腕を下ろした俺に呼応した様に金棒を下ろした彼女の

口から一言。

「ねっ、言ったでしょ」

安堵は消え、腹の奥底から寒気が体全体に広がった。

「ちよつと待て、なんかおかしい」

「何が？」

この野郎、とぼけてやがる。ここは冷静に

「これは失敗したんだよな？」

「あんた見てた？成功してるじゃない」

否、必死に

「ふざけんじゃねえ！ お前言ったよな。成功したら消えるって言ったよな！ でも消えてねえじゃねえか！ 粉々になってんじゃねえか！！」

「往生際が悪い！」

「当然だろ！ そんなやり方じゃ一発で昇天しちまう！」

「何見てたのよ！」

「粉々に吹っ飛んだ岩だ！」

「よく見てなさい」

そういつてキイナは粉々になった岩の残骸を拾い上げ、積木の様に石の塔を作り上げた。

「もとの岩の大きさはあんたより頭一個分くらい大きかったでしょ？でもあら不思議、いつの間にかあんたの身長と同じくらいに」

そうかそうか。この娘は無理を押し通してまでも、俺を粉々にしたいのか。もしくは、天然で言っているのであれば速やかに義務教育からやり直すことをお勧めする。

「お前の積み方の問題だろ！」

「頭一個分ワープしたのよ。」

「それが本当だとしても頭一個分じゃ意味ない！」

「だから分割をしてワープさせていくのよ、分かった？」

人間の体は一部分一部分着脱できるほど便利ではない。もしやこいつはプラモデルは人間の体の構造と同じ、ということのを頭に叩きつけられて育てられたのかもしれない。そんなことを危惧をしてみようほどの危険思考だ。

「わからねえよ！ そんなだるま落としみたいく体抜かれていつてたまるか！！」

「もうめんどくさい、さっさとワープさせるわよ」

うわっ！ 問題すっぱかして金棒ふりあげてきやがった！ 逃げなきゃやばい！ やっぱ、鬼恐い！ でも背中を向けちゃだめだ。

少しずつ距離をおくんだ。今いる位置と一時間後の位置を比較してやっと動いたのがわかるぐらいの微量な運動量で離れるんだ。そん

でもってある程度離れたらそこから猛ダッシュだ。

頭の中で瞬時にそう決めて動く隙を伺う。

すると金棒の先をなぞるキイナの口から言葉がつむがれる。

「逃げようなんて思わないことね。もし逃げたら……」

そして

「腕一本は覚悟してね」

笑った。

よし……逃げよう。

笑顔でこんな事を平気で言うやつは絶対に信用できない。

成功率0%（立証済み）のワープと成功率1%の逃亡。どちらかをとれというなら俺は迷わず1%の逃亡にかける。

「あ。あとあたし100メートル6秒台だから」

「……………」

訂正しよう。

どちらかをとれというなら俺は迷わず0.1%の逃亡にかける。

「時速にすると60キロメートルぐらいかな」

十分人をひき殺せる速さだ。彼女は軽自動車と同じ扱いでいいだろう。

そう考えると足の震えが止まらない。そして動かない。

八方ふさがりとはこのことだ。

俺の作戦は彼女の言動一つ一つから与えられる恐怖によって簡単に崩されてしまった。

もう駄目だ。

そう思って諦めた時、なぜか死を受け入れられた。

俺、死ぬんだなーと自分の死を客観視してしまっているのがなに

よりの証拠。

キイナが金棒を振り抜く。速い筈のその動作を俺の目はスローモーションで捉えた。

そして俺は人生を振り返り始める。

学校生活楽しかったな、文化祭・体育祭特に。

友達とカラオケにもいったな。ほとんど手拍子叩く兼タンバリン係だった俺。

ポニーテールの幼なじみ……よく考えてみりゃ結構かわいかったな。なにかと俺の事助けてくれたし。あん時とか特に。

大小様々な思い出が頭の中で断片的に、それこそ早送りのスライドショーのように流れる。だが一つ一つしっかりと理解できてきている。

この感覚を走馬灯ということ俺は身に染みてわかっていた。

スローモーションで迫ってきていた金棒は、いつの間にか目の前にあった。

一瞬にも永久にも感じられた死ぬ間際の時間。その時間の終わり。インパクトの直前。

俺の頭に残ったのは思い出や大事な人の笑顔ではない。もっと根本的に大事な、人としての本能。

それは

「俺……童貞だ」

煩惱に満ち溢れた後悔だった。

直後、視界から世界が消えた。

スーツと全身タイツ。一見違ってるようだが、広義に解釈すれば同じグループに痛かった。めちゃくちゃ痛かった。そんなもって俺死んじゃった。ワープという名目で撲殺。意味不明だ。

頭の中では、取調室で刑事が「動機は？」と聞いたところ、キイナが「ワープをするため」と答える、というなんとも滑稽な映像が繰り返し再生されている。付け加えると、心も体も骨のずいまで鬼のキイナ氏には、カツ丼を食べてもらいたい。もちろん腐敗した状態のものを。

そういえば、あいつ頭一個分ワープするとか言ってたな。それが本当ならば俺はどこを飛ばされたのだろうか？腕か？足か？はたまた腹部か？

なんにしても明日の朝刊一面を無惨な姿でかざることだろう。でも贅沢を言うなら……体の老廃物が飛んでいてほしい。悪玉コレステロールとか内臓脂肪とかだ。死んだ時くらい、体は健康でいたい。俺、呑気な事考えてるな。死んだのに………考えてる？死んだのに？

疑問が出た瞬間、体が背中から叩き付けられた。

ドンツという鈍い音とともに、一瞬だけ体全体を強烈な痛みが襲い、感覚が消えた。

「かはっ!？」

叩き付けられたせいで、体の酸素を一気に押し出された俺は息がでなくなる。空気を求めているのに体に命令が届かず、意識だけが鮮明。ハンドルの無い車で高速道路を走るような、焦りと恐怖を感じた。

「ハアハアハアハア！」

突然息をできるようになると、呼応して、まるで波紋のように、今度は鈍い痛みが背中から広がっていった。

「いって〜!!！」

俺が一番痛みのある背中をさすりながら、言葉を吐き出す。だがそこで息を呑んだ。

「今日はマジでどうなってんだ？」

誰かに言っただけでもなく、今この状況に対してそう呟く。

「あゝも〜」

唯一の特徴であるボサボサ天パを両手で掻き回す。

おかしい。なにかがおかしい。

目の前には赤い大地を背景としてとつもない大きさの、荘厳な建物がドンと建っているのだ。そしてその両開きの扉の前には白いわっかを頭につけた人達が集まっていた。服装はスーツだったり私服だったりといういろで、中には全身黒タイツの人もいた。

白いわっかと黒タイツのコントラストはひとときわ異彩を放っている。

俺をそれを見て、全身タイツの方とは関わらないようにしようとする無意識の内に決意した。

「どうすりゃいいんだよ」

俺は確かに意識が飛んだ筈だ。だが意識を取り戻し、今現在ここにいる。

ありえないがずば抜け過ぎてうんざりしてしまう。三途の川を二度見た事がある俺でさえ思った。

夢の可能性も考えて、頬をつねる、顔を殴る、固い地面にジャンピングエルボーという一連の動作を各二回ずつ行ってみた。

結果は体全体をまんべんなく痛めつけ、なおかつ不審な目で見られるという肉体面、精神面で痛々しいこととなった。

特に全身黒タイツの哀れみの顔を俺は未来永劫忘れない。

自分のことを差し置いて……あいつは何様だ！！

なんにしてもこれで考えられる事は一つにしぼられた。

「まさかこれ、ワープしたの？」

いやいや無い。絶対無い。あんな激痛を伴う移動手段なんてありえない。でもいまここにいるし。それしか考えられない。

いろいろと考えたすえ、答えは

「理一悟死亡・ここは黄泉の世界」

という目をそむけてきた真実を受け入れた。

「なっはっはっはっはっはっはっ……ハア」

明るく笑い飛ばそうとしたが、どんどん声が小さくなっていき、

最後はため息になってしまっていた。激しく鬱。

だが泣くに泣けない。

殺された理由が意味不明だからだ。

そして再度思う。

これからどうしたらいいんでしょうか？ 俺。

実況のプロは、実況する時に私情をはさんではいけないと思う。

（解説の人は許

ここでじつとしていても意味が無いのであの集団の誰かに話を聞きたいところだが、先程の行動でほとんどの人から哀れみの目でガシ見されている。

よく考えてみると何がそんなにいけなかったんだ？ やっぱり頬をつねった事か？ 今度からは夢かどうか確かめる時は頬をつねるのではなく、何かほかの事をしようを極限までしよう。まあなんにしてもあの視線の中を、堂々と歩いていく度胸は無いので、少し間を置いて注目しなくなり次第、話を聞くことにする。

そう決めて俺は一旦地面に座る。すると集団がざわついた。

「座ったぞ」

「座ったな」

「あぐらだ」

「あぐらだな」

何人かの、俺の行動に関しての実況。

嫌な意味で注目されているのでしょうがないと不本意ながら俺は我慢した。

「少し辛抱すればいいだけだ」

小さく自分に言い聞かせる。するとまた集団がざわつきはじめ、何人かの俺実況が聞こえてきた。

「独り言だ」

「独り言だな」

「さびしいな」

「さびしすぎるな」

可哀相だと思われる。それに加えぼそぼそと聞こえるので、学校で自分の悪口を陰で聞いてしまったような心境だ。

俺は少し傷付いたものの、平静を装う。

そのまま何もせずに十分ぐらい経過した。その間ずっと集団の目

線は俺一点へとそそがれていた。それが気になってなかなか落ち着かない。

気を紛らわすために地面に転がっている石を使って小さな穴を掘る作業をはじめてみる。やりだすとすぐに集団はざわついた。そして何人かの俺実況が聞こえてくる。

「手遊びだ」

「手遊びだな」

「孤独だ」

「さては孤独死したな」

穴を掘っただけで死因を断定されてしまった。

またも傷付く俺。

我慢だ。我慢。我慢しろ

頭の中で何度もそう叫ぶ。

自分に喝を入れなおし、また十分程度あぐらをかいたまま静かにしていた。もちろん手遊びはしていない。だが何もしなくても集団はずっとこちらを見ている。

足のあたりがムズムズしてきた。二十分間足をくみかえず、あぐらをかいたままなので、さすがに正座でなくても足がしびれ始めているのだろう。

あんなに凝視されていて、いちいち行動について吟味されてしまう、こんな有名人プライベート生活みたいな状況も一因として働いていると思う。

ここで体勢を変えようものなら針のむしろだ。ストレス溜まり過ぎて爆発してしまうかもしれない。負けるわけにはいかないと、顔には一切出さず、自分の心を縛り付ける。

十分後

もう無理。もう無理です。あぐらかいて三十分ずつと見られていた。ただ俺の事警戒してんだよ！ 手遊びした後の二十分は何もしてなかっただろうが！ 解放してくれよ。右足が悲鳴をあげてるんだから。さっき指でちょんつてやったら、表しようのない不快感が右足から全身を支配したんだぞコノヤロー！

俺はもう限界ギリギリだった。

今すぐにでも足をくみかえ、右足の負担を軽減させてやりたい。

俺はそう思いながらプルプルと震える。

とその時集団に動きがあった。正確にいうとほんの一部分だけなのだがそのほんの一部分がめちゃくちゃ目立つ。

なんと、白と黒との対比が人に拒絶されている全身黒タイツだったのだ。

全身黒タイツは、自分の事を棚に挙げ、他の人と同じく俺を哀れみの目でみていたのだが、今は……なんというか小さくほえんできて俺を応援してくれているような目をしている。それは俺にもう少し頑張ってみようという活力を与えてくれた。

足のしびれは増す一方だが、それが何だというのだ。もう少しがんばろう。

そう思い、活力を与えてくれた全身黒タイツにありがとうと視線で伝えようとしたところ、全身黒タイツが何かを持っていた。

俺は「何だ？」と囁く。

囁くやいなや全身黒タイツ以外の、俺実況が耳に入ってきたが、疑問の方が気になったので無視した。

それは手の上でくしゃくしゃになっており、かろうじて黒い布の塊ということぐらいしかわからない。

俺はもつと目をこらした。

それに対して気づいたのか、全身黒タイツはとびっきりの笑顔でそれを広げた。それは

黒い影だった。いや全身用黒タイツだった。

「いや着ないからね！」

物が何なのかわかると、全身黒タイツの考えが一瞬で看破できた。あいつは俺を仲間に取りすぎりこむ気だったのか。危うく身も心をあいつ色、つまるところ黒に染められるところだった。

俺の一言を聞くと残念そうに黒タイツを直した。

そして白タイツを出した。

「色の問題じゃねえ！」

人間としての社会的地位を、再起不能なまでに陥落させる影響力が問題なんだよ！

なんか裏切られたような気分だ。

もうどうでもいいやと、しびれていた足をのばす。

当然俺実況が聞こえてきた。

先程の手酷い裏切りにムカムカしていた俺は実況に少しでもイラッとしたら文句を言ってやると決める。

「足のばした」

「足のばしたな」

「態度でかいな」

「……………死ね」

よし。その喧嘩、買った。

俺はゆっくり立ち上がり、顔をあげ、集団をギロリと睨んだ。

立ち上がった事により集団がまたざわつくがもう聞こえない。

視界には暴言を吐いたであろう人物。俺はそいつに向かって歩きだした……………が

「あのくすいません」

後ろから声をかけられた。

ドロップを買って、ハツカが一番最初に出た時のやりきれない気持ち。

「あの〜すいません」

そーっと言葉を後ろからかけられた。いますぐにも喧嘩売ってきた奴を殴り飛ばしたい衝動をおさえつけ、後ろを向く力に強引に変換させる。

「何だ！」

「ひっ」

グルツと後ろを向くと、俺の前にいたのは、三十後半ぐらいのオツサンだった。俺の勢いに気圧され、少し後ずさりしたが気を取り直し話を始める。

「私、ここに初めてきたもので」

周りをちらちらと警戒しながら不安そうに言うおっさんの頭にはあの集団と同じく光るわっかがついている。ご愁傷様と頭の中で黙祷し、「オツサン誰？」と当然の疑問をぶつけてみる。

「私は磯部と……ちょっと待ってください」

オツサンはスーツのポケットを探りはじめた。名刺でも出すつもりだろうか。

「名刺なんていいですよ」

名刺なんて大人同士の付き合いのアイテムだ。そんな物を渡されたら、子供なのにどういう立み位置で会話すればいいか若干の迷いが出てしまう。

俺は両手を前に出しつつ、いらないう意思を伝える。

「いやそうではなくてですね……」

探すのに必死な様で、少し声が小さいがそう聞こえた。では何だろうか。

「高校生の俺におこずかいでもくれるんですか？………ってそりゃないか。ははっ」

誘い笑いをつけて冗談で言った……はずだが

「お近付きのしるしにちょっとわいろをと思ひまして」

あながち間違つてはいなかった。

「待つてください。なんでふところからそんな物騒な物が出てくるんですか！」

「あつごめんごめん、つい癖で」

頭を下げるおじさん。一介の高校生相手にその癖は普通出ないだろう。せめておこづかいと言って欲しい。

「オッサン、いい大人なんだし、俺にそんなペコペコしないでいいですよ」

先程の怒りは、オッサンの腰の低さによつて忘れ去っていた。

「ごめんごめん」

また謝られた。もうこの低姿勢が自分の中で定着しているのだろう。オッサンの過去はわからないが、なんなく会社の一社員だったと想像できる。

「でも大人だからこそ、威厳を保つためにこれを受け取ってくれ」

断つたのにオッサンはズボンのポケットの奥に手をつっこんで何かを掴みとり、おもむろに握つた拳を突き出してきた。

「いや、受け取れないですよ」

よくニュースで、政治家の汚職や裏口入学などを見ているので警戒は緩められない。だがもしその警戒がこのオッサンをがっかりさせてしまったら、それは俺の責任だろう。

一度受け取らない様な事を言つたが受け取ることにする。

「まあどうしてもつて言うなら」

そう、しょうがないのだ。これは俺の私腹を肥やすためではない。オッサンの威厳を守るためなのだ。

理由をつけ、現金を握っているであろうオッサンの突き出された拳の下に、手で器をつくる。そして俺の手の上には

「存分に使つてくれ」

粉々に砕けた赤い石と、ドロッドロツのドロップが落ちた。

「何の冗談ですか」

キョトンとした目でオッサンを見る。こんな物……存分に使用できる時と場所を覚えていたきたい。

「何を言っているんだ」

やれやれという顔と呆れた様な声に殺意を覚えたが、ぐっとならえ、言い分を聞いてやる。

「石は殺意を覚えた相手に投げつける時に、使ってくれ」

「そういう事ですか」

納得出来たので、至近距離でおじさんに石を投げた。なんて便利なんだ！ 早速使用できるなんて！

「痛っ！ 時と場所を考えて使ってくれ！」

「今がその時です」

地面でうずくまって痛みに悶えるオッサンに、立て続けに石を投げつける。

投げ続けると当然石がなくなるので、そこら中に落ちている石も使った。

「用法用量を守って正しくお使い下さい！」

「用法用量は厳守しております」

さつきからオッサンは何を言っているんだ？ こんなにも有効

活用しているのに。

「ちよっ、投げすぎ」

もはやダンゴムシの形態模写と化しているオッサンは、そんなことをほざきやがった。

だから何を言っているんだ。適量は最低でも相手が意識を失うまで、最高は死に至るまで、だろ。

「ホント痛っふざけて痛っすいません痛っでした痛っごめんなさい痛っ」

慈愛に満ちている俺は罪人のざんげを聞き入れ、冗談はここまでにしておくことにした。

投石を辞めても、しばらくオッサンはダンゴムシの形態模写を続けていた。

石を手の上でじゃらじゃら鳴らすと、音に反応してびくっと少し縮む姿が、少し面白い。人の支配をしているようで。

「ドロップの秘密を知りたくないかい？」

得意げな声で唐突にオッサンがしゃべった。

俺の手は石を投げている時も、ずっとドロップを持っていたのだ。なんとなくだ。

「どつという意味だ？」

「もう一度聞く。ドロップの秘密を知りたくないかい？」

オッサンの声色が一転して低く、そして鋭くなった。おじさんの変化にただならぬものを感じた俺は黙り込む。

「知りたくないかい？」

もう一度問われた。

その言葉は、オッサンとの距離こそ近くないものの、耳元に迫り、するりと入ってきた。やがて頭の中で何度も反響し、知りたいという好奇心へと変わる。

まさかこれはどこかの王家に先祖代々伝わる秘宝なのかも。

もしかこれは古代の強大な魔力を秘めた禁断の食物なのかも。

厨二病的発想で馬鹿な事が広がる。だがそうなってしまっ程の力が、おじさんの言葉にはあった。

俺は押し寄せる好奇心の荒波に吞まれ、首を縦に振った。

俺は待った。ただひたすら待った。オッサンの言葉を。だが一向に声が聞こえてこない。オッサンの沈黙に痺れをきらし、文句を言おうとしたが、そこで俺は気づく。

こんなシリアスな場面でおじさんはダンゴムシの形態模写を続けていた事を。すなわち顔をうずめているので俺の体を使った意思表示は無意味に終わったのだ。一人芝居をやらされた感がするので、とてもイライラする。かといってオッサンは別に悪くない。たんすの角に小指を打った様な、ぶつけようのない怒りに抵抗しながら、口で意思表示をする。

「聞きたい」

その言葉を待つてましたと言わんばかりにオッサンは笑顔で顔をニユツと上げた。亀が甲羅から顔を出す姿に似ている。

「そのドロップはね……」

言葉を切つて焦らす。

「一体何なんだ！」

オッサンの演出にまんまと引つ掛かり、催促する俺。

満足げな顔をするオッサン。

そして

「それはね」

遂に

「私が食べていたものだ」

「きたねっ!!」

聞いた瞬間、地面に物を投げ捨てた。

「ああー!!」 そのドロップは意中の相手に食べさせ、間接キスを知らぬ間に行わせるというラブコメアイテムだったのに!!」

嘆きながら地面に落ちたドロップに這い寄る人間のくず。(形態

模写中)

「あんたが食べたもんだろが！」

「だからこそ君がその女の子にドロップを渡す妄想をして、私とその女の子との間にフラグを立たせるといふ役割があつた！」

腰の低さは鳴りを潜め、物凄い必死だ。(形態模写中)

「なんで俺があんたの妄想に付き合わされなきゃなんねえんだよ！」

「こいつ……当初の目的の威厳を保つどころか、逆に腐った部分が浮き彫りになっている。」

「気に入らないかね？」

「当たり前だ！」

「ではちよつと待つていてくれ」

そう言つと、やっと形態模写から立ち上がり、人間のくずはどこかに行つてしまった。しばらくすると、戻ってきた。何をしてきた

のだろうか。汗だくになっている。

そしてまた俺の手の上に赤い石を置いた。

「オッサン。殴っていいか？」

俺は手の上の石を握りしめる。

「量が気に入らないのか？　そうかそうか」

オッサンは俺の憤りの理由を勝手に解釈し、ポケットから、袖口から、靴下からと物が入るあらゆる所から赤い石を出し、俺の手の上に置いてきた。

「……………」

俺の手の上には溢れんばかりの大量の石が乗った。これが意味するのは弾薬装填完了。砲撃開始。

「痛っ痛っ、なぜだ！　なぜ君の怒りがヒートアップしているんだ！！」

考えなくても、わかるだろうに。

大量にあつた石もすぐに無くなった。俺はリロードせず、代わりに拳で沈めることにした。一度石が無くなったのを見てオッサンは安心してしたが、拳を固めた俺に気付き、泣きそうになる。

「待ってくれ！　話せばわからあえる！！」

オッサンの遺言はその言葉だったが、俺は無視し、思いつきり顔面に拳をたたきつけた。

「がぁばぁ！！」

人間案外飛ぶもんで、オッサンは3メートル程宙を舞い、地面に仰向けで倒れた。

「あゝすつきりした」

前々から抱いていた怒りとオッサンと接した事で発生した怒りがミックスされていたがさっきの一発ですべて発散された。俺の怒りは冷めるのが早い。

俺はオッサンの顔を殴った時についた脂をサマーラックスで拭いた。

そしてさっさとこの場を離れようとしたら、驚くべきものが目に

はいった。

「こ、これは!?!」

それはオッサンの頭が外れかけていたのだ………要は桂が取れそうになっていたのだ。

「哀れだなあ」

さっきまで憤りを覚えた人物だが同情してしまう。俺はオッサンの方に近づいていく。

このオッサンはあんな事をしたとはいえ親切心は少なからずあったと思う。結果的に醜態を晒してしまったが。

だから俺はオッサンの

「オッサン。殴ってごめんな」

見苦しい姿を見せないために

「ほいっと」

桂をふところにした。

これで安心だ。オッサンはこれからありのままの自分で過ごしていける。そう、ふさふさの毛髪などという現実から逃げ、偽りにしがみついた姿をせずに。

「がんばれよ、オッサン」

真実の姿をあらわしたオッサンは今、何よりも輝いていた。特に

……頭が。

一難去ってまた一難……いや二難……いや測定不能。

「ふっ」

めんどくさかったけど、なんか落ち着いた気がする。あのオツサンのおかげだろうか。俺は静かにオツサンの桂をみつめる。

「……………」

この頂戴したカツラは予想以上にギトギトなので、どこかで速やかに焼却処分するとして、これからどうするか、それが今一番問題だ。

「まあ考えても何にもならん。行動行動」

独り言で自分を納得させ、あの荘厳な建物に並んでいる人達に話を聞いてみる事にする。もう視線を感じないし大丈夫だろう。

「つてあれ？」

俺の頭には疑問符が浮かんだ。なぜなら両開きの扉の前を見たのだが、さっきまでいた様々な人達が全員いなくなっていたからだ。視線を感じないのもこのためか。妙に納得してしまった。

何気なしに後ろを振り向いてみる。さっきまで接していたオツサンもいなくなっていて、あるのは投げつけた赤い石ころだけだ。

「またまた……どうなってんだよ？」

頭を軽くさする。またありえない事だがもう完全になれてしまっている。だけどさすがにこんなでかい建物の前に一人ぼっちというのは寂しい。遊園地の閉園時間ギリギリの寂しさを連想させる。

「あゝイライラしてきた」

寂しさがふつつつと怒りに変わってきた。俺は右の手の平に、左手をグーにしてパンパンたたきつけ、少しずつ怒りを発散させる。

もとはといえば、キイナとかいう頭のいっちょちやってる鬼のせいだ。ふざけやがって。今度会ったら、たとえ美少女でも一発ぐらいかまさないと気がすまない。

そう考えていると両開きの扉が開いた。

「そうそう。キイナの格好ってあの子みたいに、やけに足を露出させた赤い着物で、帯は虎柄で、目と髪は着物同様赤くて、角が生えてて、その角は右が折れてて………ってあいつじゃねえか!!」
あまりにも都合の良い展開にポツとしてしまっていたが、俺は即座に切り換え、キイナの方へ怒りを糧に走り出す。

「このうらみ晴らさでおくべきかー!!」

そう叫ぶとキイナは走ってくるこちらに気づいて「やっと見つけた」と疲れたような顔をした。その手には金棒が握られていた。

それを見て、俺は本能的に危険を察知。走りながら、鮮やかな動作で土下座に移行。そのまま地面を滑り、キイナの目前で止まる。

そして一言。

「その節は大変御迷惑をおかけいたしました!!」

俺は自分の中で最大級の謝罪の意を表明した。

「あんだ……何やってんの？」

そうだよ!! 俺何やってんだよ!! 怖じけづいちゃった

よ……!

自分の過ちに気づき、顔を上げる。するとキイナを見上げる形になる。位置的な関係から、ある物が見えてしまった。柄は青と白のシマシマだった。

数十秒の沈黙の中、俺はそれを目に焼きつけ、一言。

「まことにありがとうございます!!」

俺はいまだかつて無い程の感謝の意を表明した。その瞬間俺の顔面にキイナのつま先がグリーンヒット。

「いったー!!」

ひっくり返って、痛みに悶える俺にキイナは吐き捨てるように言う。

「変態」

………まあこれは俺が悪い。納得いかないが俺が悪い。ここは素直に謝ろうと思う。金棒で殴られそうだし。

「ごめんなさい」

顔を抑えながらそう言うと、歯を剥き出しにし、金棒で追い討ちをかけようとしていたキイナは、少しプルプルと震え、しばらくすると渋々金棒を下ろした。危ない。また撲殺されるところだった。キイナは冷静になるためかもう一度「変態」と言ってきた。その顔は赤く、目が笑ってない事もあり、莫大な殺意が感じられた。

「ホントにごめんなさい」

「まあいいわ」

仕方ないという感じで許される。腑に落ちない。まったくもって腑に落ちない。

俺がこの理不尽な状況に嘆いていると「もうさっきのことはいいからついてきなさい」とキイナがきつい物言いで、両開きの扉の中に入っていった。バタンツと大きな音をたてて閉められた扉が、まだ怒りがおさまっていない事を雄弁に物語っている。

キイナという嵐がいなくなりまた静けさを取り戻した空間で俺は咳く。

「ついてこいといわれましても……………」

相手は自分を撲殺した相手だぞ。そんな奴についていたら何をされるかわからない。でもここに一人でいても何もなしな。

俺は腕を組んでうなりながらついていくべきか考えるが、扉越しから「ついてこい!!」と怒鳴られ「はいわかりました!!」と即答し、やむなく建物の中に入った。また撲殺されるのではないかという不安を抱きながら。

一難去ってまた一難……いや二難……いや測定不能。(後書き)

感想、評価、指導、誤字脱字発見まっています。誰でもお気軽にどうぞ。

昼のサスペンスは子供達にとって地獄絵図。

建物の中は外観と同じく荘厳な雰囲気だった。左右の壁に等間隔で埋め込まれた柱。柱と柱の間には、扉が二つずつあり、奥にはでっかい扉があった。あのでっかい扉を中心として完全に左右対称となっていて、美しいシンメトリーを保っている。

「さっ、行くわよ」

建物の中で腰に手をあてて待っていたキイナはクルツと回って歩きだした。不安を抱えながらも俺はそれについていく。

「これからどこ行くんだ？」

撲殺という不安を取り除くために聞いてみた。

「閻魔大王様のところ」

そついや撲殺される前にもそんな事いつてたな。もしかしてこいつ、殺したっていう事実わかってるんじゃない。

「お前、ワープさせるとか言ってたけど、殺したって事はわかってるんじゃない」

「だからワープだって言ってるでしょ………もういいわ、閻魔大王様に聞けばわかることだから」

立ち止まって後ろを向き、怒りをあらわにしたが、諦めた表情になり、また歩きだすキイナ。これ以上問い詰めると、前と同じ様な状況でキイナが二度目の犯行に及びそうなので、辞めておく。

半分程度まで進んだところで俺達より前の、柱の間にある扉が開き、男女の若い鬼が白装束を着た人を連れて出てきた。

「あれってお前の友達とか知り合いとかそんなのか？」

俺達に気づきひそひそ話を始めた男女の鬼に疑問をもち、キイナに聞いてみる。

「そんなもんね………友達ではないけど」

キイナは素っ気無く答える。

「ちらちら見てるのは、気にしなくてもいいわ。みんなあんな感じ

だから」

「そうは言われても、気になるもんは気になる」

俺は気分が悪いので眼を飛ばす。それを知ってか知らずかキイナは呟く。

「それに……………」

「ん？」

その声は小さく

「案外あんたの事、見てないかも」

自嘲ぎみな声だった。俺はその言葉の意味がわからず「どういう意味だ？」と尋ねる。

「そのまんまの意味。さっ、着いたわよ。くれぐれも失礼の無いようにね」

結局俺の疑問は疑問のまま。まあ深く追究しなくてもいいだろ…

…………… それにしても

「扉、でかいな」

遠くから見ているも分かっていたことだが、相当でかい。普通の扉の三倍の大きさがあるんじゃないかなろうか。この大きさから中にいる者、閻魔大王の大きさも容易に想像できてしまう。だがもう俺はわかってている。

「失礼します」

「いや、よく来た」

「ほらやつぱり」

重々しい扉を開けて待っていたのは、予想通り小学五年生程度の男の子だった。

「あんた！ 会っていきなりやつぱりってどういう事よ！！」

俺に対してキイナは文句をいつてきた。

「いやだって、今までの俺の想像を壊してきたんだから、閻魔大王も凶悪な姿を想像させておいてそんな奴がでてるんだろって想像できたから」

俺が頭をかきながらそう言うと、外見小学五年生の閻魔大王は失

礼な事を言ったのにもかかわらず「やっぱり又シは面白いのう」と声変わりしてないキーの高い声で言って笑った。いい人だなあ。これも予想通り。

「ちよつと大王さま！ 笑って許せるような事じゃありません！」

閻魔大王のために俺に文句つけているのに、その閻魔大王が俺を笑って許した事に納得がいかないご様子。それを見ながら俺はキイナが敬語を使ったことで、キイナが閻魔大王をしたっていることを理解した。

俺はキイナをまあまあと言ってなだめる。

「うるさい！ なんであんなにだめられなきゃなんないのよ！」

キイナは俺の方に向き直った。

「大王さまが許しても、あたしが許さないんだから！」

こりゃ相当だな……。お熱いね。好きなら付き合っちゃえよ。閻魔大王はというとキイナが自分のために怒ってくれているのがうれしいのか、その気持ちだけで充分と言いたげな笑顔でキイナを止め始める。

「もうそのくらいでー」

「確かに！！」

俺の目を見ながら両手を握り締め、キイナは叫ぶ。

「確かに大王さまはあんななりよ！！」

あれ、好きな相手の呼び方にとげがあるような……。恋は盲目って自分で理解してるもんなの？ 閻魔大王はというとキイナが自分のことをあんななり呼ばわりしたのに傷ついたようで、傷つくよと言いたげな引きつった顔で止め始める。しかし構わずキイナは続ける。「夜一人でトイレに行けなかったり、目つき悪い人が来たらすぐ天国にしてあげようとしたりする怖がりで、本当は百歳ぐらいなのにスーパー戦隊シリーズとお母さんといっしょを毎回見逃さなかったり、おもちゃやおかしを欲しがるその精神年齢は見た目以下だしー」

性格、趣味、嗜好を暴露された閻魔大王は涙目になった。

「そのくせ性に興味をもちだして、ナース服・セーラー服・メイド服が大好きだしー」

性癖を見破られていた閻魔大王は机に頭をぶつけ始めた。

「座高が高くて、歯は全部乳歯だしー」

身体的コンプツプレクスを言われた閻魔大王は椅子から崩れ落ちた。

「みんなから陰でエロ魔大王って言われてるしー」

自分の知られざるあだ名を知った閻魔大王は体操座りで何かぶつぶつ唱え始めた。

「あたしも嫌いで嫌いで嫌いでー」

「ストップ」

俺はキイナの言葉の暴力を止め、

「閻魔さん、はやまるな」

ナイフで切腹しようとする閻魔大王も止めた。

「あんた、まだ若い身空で死を選ぶようなまねしちゃいけない」

事の発端は俺なのに、なぜ俺とキイナの立場が逆になっているのかよくわからない。

低くゆっくりと説得する俺はさながら老練の刑事の様。

「僕はもう生きていく自身が無い」

小さい声だ。そこまで追い詰められることもなかるうに。よく見ると持つナイフは小刻みに震えている。閻魔大王とて死は恐怖に値するもの。そういうことなんだろう。

シリアスなのか笑っていいのか迷ったが、選択を間違えて閻魔大王が自殺というバッドエンドを避けるため説得を始める。うん……あほらしいけど。

「閻魔さん……あんた死ぬの怖いんだろ」

俺の迫真の演技に閻魔大王のナイフの震えが止まる。

「こ、恐くなんかない！」

「いいや、恐いはずなんだ。この世に生まれた者には死がつきまとう。そう……生きてし生ける者全てが人生の終着点、死を恐いと思うのは当然なんだ」

何言つてんだろ俺。真面目に演技してるけど物凄い恥ずかしい。横から啞然としたキイナのいたい視線がつきささるのも俺の羞恥心を加速させる。俺がまいた種だけとお前が水を与えたんだからな！という文句を押し殺し、説得を続ける。

「だからあんたの言ってることは嘘だ」

「嘘なんかじゃない！！」

ナイフを握る手に力がいっぱい。よし、シナリオ通り。暇つぶしで見た刑事が妙に暑苦しいドラマシーンの記憶が役にたった！俺は頭の中でガッツポーズしたが、気を引き締める。ここからは自分のアドリブだ。

「じゃあそれが本当だとしよう……………だがあんたは閻魔大王だ。その仕事は何だ？」

ただ静かに、大事なことを気づかせるため、閻魔大王に問いかけた。閻魔大王は俯いた。自分にとって大事なこと、やっぱりわかっているようだ。ただそれが受け入れられないだけ。その事を確信した俺は閻魔大王にとって大事なことをつきつける。

「あんたの仕事は死んだ人達をこの世界で迷わないように導く事だ。それ投げ出してなんになる。不安を抱える人が行き場無くすだけだ！！」

強くねじ込まれた俺の言葉に閻魔大王は答えない。だが俺にはわかる。クライマックスは近い。もう一押しだ。もう一押しでハッピーエンドでこの場を飾れる。そして俺は最後の一手を打つ。

「それに……………あんたを愛する人もいる」

俺の一言を聞いて物凄い驚いた顔の閻魔大王。いいリアクション。これが閻魔大王の自殺願望を崩し去る最後の一手。閻魔大王も男だ。自分を愛してくれる人がいながら自殺なんて恥以外のなにものでもない。こうすれば自殺を阻止できるだけでなく、見たところツンデレのキイナの届かぬ恋も見事成就。俺、愛のキューピットじゃね。あとはキイナに任せるのみ。

「キイナ言つてやれ」

俺はキイナに任せた。心は子の旅立ちを見送る親のよう。少し戸惑いぎみのキイナがもどかしい。しかしここはもう俺の出る幕じゃない。ただ俺はキイナの言葉を待つ。そしてキイナは頬を赤く染めながら、

「あたしはー」

大きく

「大王さまのことがー」

力強く

「別に好きではないです」

俺の期待を裏切った。すかさず俺は閻魔大王に飛び掛り、羽交い絞めにする。

「やめろ！ 生きること諦めるな！」

「うるさい！ もう駄目だ！ もうわしは死ぬ！」

俺の冷静な状況判断からの迅速な対処によって、ただ暴れるだけとなった閻魔大王。見た目子供なの妙に力が強い。気を抜けば拘束が解かれそう。これが閻魔大王の実力なのか、はたまた山頂から奈落の底へ突き飛ばされた者の悲しき最後の馬鹿力なのかはわからない。それは置いてキイナだ。

「俺の決死の説得、無駄にすんじゃねーよ！」

閻魔大王の謎の力と応戦していることよって安定しない声で俺は叫んだ。それに対してキイナは

「あゝ〜そういう事」

今、俺の迫真の演技の意味について気づいた模様。

「気づけよ！ 俺が意味もなくあんな奇行にはしると思ってんのか！」

「思ってる」

俺は相当イタイ人物と認識されているらしい。

「じゃあもういいよ！ こいつの説得はお前がしろ！」

「言われなくてもするわよ」

いままでの俺の努力と恥を踏みにじるかのように簡単に言いやが

った。

「やってみやがれ!!」

俺の挑発を完全に無視し、キイナは説得開始。

「大王さま、あなたはさつきも述べた通り評価は最悪です」

瞬間、閻魔大王の抵抗が強まった。火に油注いでどうすんだよ! と思ったが

「それにまだまだあります」

言い足りなかったらしい……。俺はどうやら勘違いしていた。キイナが注いだのはガソリンだ。よく燃えるね。また一段と閻魔さんの力が増したよ。拘束はもうギリギリだ。俺はキイナにバトンタッチしてすぐ諦めモードに。だがそんな俺の耳に

「でも!」

キイナの力強い声がすりこまれた。

明らかに変わった。この場の空気、雰囲気。なによりキイナの目が。俺は本当に勘違いしていた。キイナはどんなに不満でもずつついてきたのだ。その忠誠心は並ではない。

俺の演技なんかでは説得できなかった閻魔大王の心を突き動かすことができる。そう確信できた。俺の中で諦めは消え、光が見え始める。

「大王さま、あなたはー」

キイナの最後の一手。それは

「いい人です」

期待はずれという言葉がしつくりくる。キイナさん、あんたが抉った心の傷はそれくらいで治癒できるぐらいの深さじゃありませんよ。そう思ったが俺はツツコム気も失せていた。だが

「そんなので説得できる……わ……け?」

最後まで俺は言葉が出なかった。気づけば閻魔大王がおとなしくしていたからだ。嘘でしょ……こんなに簡単に。俺、馬鹿みたいじゃない。俺は自分の行動の後悔を隠し切れない。

「離してはくれぬか」

後悔という渦の中、声変わりしていないキーの高い声が聞こえた。俺は腕の力を抜く。すると閻魔大王が自分で立ち、そのまま何事もなかったかのように椅子に着座。

「あらためて歓迎しよう。理一悟」

本当に何事もなかったように。俺の恥は無駄になっていた。

冗談は程ほどに。

さつきまで、自殺願望を抱いていた閻魔大王は、キイナの軽い説得と、俺も小さい頃何度もお世話になったおいしい棒で完全に立ち直っていた。

俺はおやつに負けたという現実と後悔に押し潰され、体操座りではあ」と心の扉を固く閉ざした。すると閻魔大王に「理一悟」と呼ばれた。やる気が猛烈に無い俺は「はあい？」とふぬけた返事。「何やら物凄く落ち込んでいるようじゃな……心も閉ざしてある」ええ、そうですよ。俺は心を核シェルター並の固さで閉じてますから。

「そうなつては話ができません」

どうするかと考え込む閻魔大王。手を顎に当てる仕草は、小学五年生の外見には似合わない。少し考えると何かを思い付いたようで顔がパツと明るくなった。どんな方法だろうが無理だよ。俺は絶対に心を開かない。あんな恥をかいてしまつては。

「キイナ、あやつを物理的に開いてしまえ」

「わかりました」

心の扉解放！！

「話とはなんでございましょうか」

俺は警戒心ゼロのスマイルを作る。それを見つめ、キイナは

「えいつ」

「両目がー！！」

チヨキで迷わず目潰し。なぜに！？ いきなり視界を奪われてしまった。その後両目を抑え、悶える俺の耳に入ってきたのは「ナイスじゃ」「あたしもスカツとしました！」という憎たらしい二人の声とハイタツチの音。

「ふざけんじゃねーぞ！ いきなり何してくれとんじゃー！」

視力がじよじよにもどりはじめ、俺は反論。

「それで話のことなんじゃがー」

無視された。文句を言いたいが、よく見るとまたキイナの金棒がちらついで、恐い。なので止めておく。調子狂うよ、まったく。

「お主、地獄行きじゃ」

「調子狂うよ。まったく………じゃねー！」

いきなりのカミングアウトにリアクションを間違えてしまった。

いや、どういう事？ 見た目は子供、仕事は閻魔の、こいつは何を言っちゃってくれたんだ。目の痛みは溢れ出す驚愕や疑問、怒り、焦りなどのその他もろもろにより吹っ飛んだ。俺は机をおもいつきり叩く。

「どういう事だよ！！ おい！！」

「じゃからお主は地獄行きじゃ」

「俺別に悪い事してないぞ！」

付け加えれば、三途の川から生還してからは、なるべく善行を積んできた。

「いやの、ぬしのやってきた事は良い事ばかりじゃよ」

閻魔大王がいつの間にか出した、閻魔帳と平仮名で書かれたノートを目に通しながらそう言った。ちゃんと善行はカウントされているらしい……では何故？

「ぬしがやった善行は、何かしら意識して行った行為じゃろ？」

閻魔大王が目だけをこちらに向ける。

「えっ？ そりゃまあ……」

確かに三途の川から生還した後、俺は天国地獄を意識しだして、天国に行けるよう、良い事に尽力してきた。それがいけないのか？ 「下心満載で善行を積んでも、大したポイントにはならん。その都度その都度困っている人の力になりたいと思うことができる人だけ、天国に行くことができるんじゃ」

「うっ」

閻魔大王に正論を突き付けられた俺は、さっきまでの勢いは消え、口をつぐむ。

「天国のために善行をしてきたお主が天国に行けず、別に天国など意識しておらん者が天国に行く。不思議な話じゃの〜」

皮肉が俺の心に突き刺さる。反省してます。

「ただワシがちよつといらついたらつてのも、あつたのじゃがー」
反省は取り消しだ。

「私情、はさみこんでんじゃねえか!」

「いやワシ、閻魔だからいいじゃろ」

「職権乱用!」

大胆過ぎて逆に清々しさを感じる。キイナも上司の仕事の適當さに、驚いているようでー

「地獄行きでは罪を洗い流した後、違う魂に生まれ変わるじゃないですか! 完全に魂を消しましょう!」

ーはなく俺の罰をより重くするため奮闘。

「輪廻転生さえ許してくれないのか!」

形勢の不利を感じた俺は、改善を試みる。焦っているため少し早口で

「天国に行くための明確な基準とかは無いのか?」

切羽詰まった俺の悪あがき。

「あるわよ」

答えたのはキイナ。

「歳にもよるけど……あんたぐらいだと、死んだ時の点数が十万点以上だったら天国、以下だったら地獄」

何をすれば加点、あるいは減点されるのかわからないので、イマイチしつくりこない。

「普通に生活してれば、まず地獄行きは無いわね」

普通に生活してて、地獄行きが決定した俺は泣いていいですか?

キイナの言葉で、俺の目には一筋の涙が。

「何で泣いてんのよ?」

怪訝な顔のキイナの視線が突き刺さる。

「この世の不条理に泣いている」

「あんたが情緒不安定だつて事は分かったわ」

「俺は感情表現が豊かなだけだ！」

「そのポジティブ思考は充分長所になりえるわね」

「そうか！　ありがとう！」

馬鹿にされた感が否めないが、素直に褒め言葉として受けとつておこう。

「つてそんな事じゃねんだよ。本題は！」

完全に相手のペースに乗せられていた。会話の主導権を握るべく、閻魔大王に詰め寄る。詰め寄ったのにも拘わらず、ピクリとも動じない閻魔大王はさすがというべきか。逆に引き下がりそうになるが、ぐつとこらえ自分の疑問をぶつける。

「俺の点数は？」

「百点」

「低っ！？」

まさかそこまでとは思わなかった。俺は自分のやってきた事の無力さに、手を地面につけ、悲しみに打ちひしがれる。閻魔大王はそんな俺を励ますように

「本来なら充分天国に行ける点数なんじゃよ。又シの点数は」

「でも地獄行きなんだろ」

俺は顔だけ閻魔大王に向ける。

「理由は一体何なんだよ？」

力の無い声だが、理由がしょうもないものなら、つかみ掛かる気満々。

「だから、いらついたからー」

俺はゆっくり閻魔大王の胸倉を掴んだ。そして後ろからゆっくり頭をわしづかみにされた。おそらくキイナであろう。

「キイナ、その手を離さないと閻魔大王を殴り飛ばすぞ」

「あんたが大王さまが殴り飛ばすなら、あたしはあんたの首から上を飛ばす」

「……………」

ここは一旦引いておこう。身の危険を感じた俺はキイナの交換条件をのみ、手を離す。自由になった閻魔大王は襟を正し、椅子に深く座りなおした。そしてため息をついた。

「近頃の若者は切れやすく困る。冗談もわからんのか」
「やれやれといたげな、手を広げたポーズ。」

「冗談は会話のアクセント程度にしるよ、閻魔さん。あとキイナさん、頭が割れるように痛いのは気のせいですか？」

俺がそう言うと、頭の痛みが増した。『気のせいではない』という、彼女の返事として受けとろう。

「もう手を離してくれ」

俺の願いは聞きいられないようで、また頭の痛みが増した。『駄目』という意味だろうか？

「駄目じゃなくて……痛いんですが？」

言い終わると、またも俺の頭に痛み。これは……『分かっている』という意味か？

「痛覚を通して語りかけないでください」

冷静に言うと、やっと離してくれた。これが正解か。

「で話を戻すけど、本当の理由は何なんだ？」

まだ少し痛みを感じるが無視して、尋ねる。

「お主、二度、死の淵から助かったじゃろ。その影響じゃ理由はそれ？ 納得いかねえ。」

「何でそれが地獄行きに繋がるんだよ？」

「だから、お主のような者ががんばるのが、いらつーー」
ぶん殴ろう。

「閻魔さん……覚悟はできてるな？」

「じゃ、あんたは死ぬ覚悟、できてるのよね？」

「すいませんでした」

一時の怒りでこぶしを振るえば、物理的に身を亡ぼしてしまう。キイナの嵐の前の静けさを持つ声はそれを教えてくれた。

「冗談は無しにしてくれ」

「わかった」

やっと話が前に進む。

「死ぬ筈だったのに、生き返ってしまったから、その分点数を代償としてひいたのじゃ」

かるーく言っつけてきやがった閻魔大王に対して、俺は不満いっぱいだ。

「何つか納得いかねえ」

理屈はわかるけど……自分の地獄行きを簡単に受け入れられるわけがない。こうなったらプライドとか男とか捨てて、こびへつらつてやる。カツコ悪い？ 知るか、そんなもん！

俺は交渉を持ちかける。少し腰を引いて、両手をもみもみ。こびる声で

「閻魔さーん、お菓子好きなんですよね？ だったらー」

「無理。キイナ、連れていけ」

「えっ！？ ちよっ、俺の話聞けよ」

即座に交渉決裂。気づけばキイナに羽交い締めにされていた。いつの間に！！

「おい離せ！！」

俺の抵抗も虚しく、キイナに背中から抱えられた。このままだと本当に地獄行きになってしまう。

頭に浮かぶのは、煮えたぎるかまゆで地獄や血によって赤く彩られた針山地獄などの阿鼻叫喚の嵐。そのどれもで罪人は、もがき苦しんでいた。その中に仲間入りするのは御免だ。どうすれば現状を打破できるか、頭を絞りに絞って考え出そうとする俺。だが出ない。焦る俺はジタバタする。

「冗談じゃ」

そしてキイナとともに盛大にずっこけた。

「おい！ 冗談がへビーすぎるぞ！！」

人の死後の進路にできえ、冗談を織り交ぜてくるとか、質が悪すぎる。起き上がったキイナも上司の仕事の適当さに驚いてるようだ

「……………ツチ」

「ーは無く、心底不服なようだ。」

「舌打ちするな！」

睨んでくる目が、鋭くて物凄く怖い。拘束が解かれた俺は、急いでキイナから距離をとった。

「あつ、地獄行きは決定事項じゃから」

キイナの目に一瞬で、輝きが。そして俺はまた後ろをとられ、息つく暇も無い早業で、羽交い締め。何たる不覚！

「閻魔！ 何が冗談なんだ！？」

「またも訪れたピンチに、俺は閻魔大王に縋り付く。」

「交渉を受けてやるということじゃよ」

願ってもない言葉だ。俺は僅かな希望の光に安堵。そう考えていると「ただしー」と閻魔大王は付け加えた。

「要求はこちらのものをのんでもらう。よいな？」

「もちろん！！」

閻魔大王の問いかけにキイナの拘束を振りほどきながら即答した俺。何を要求させられるか分からないけど、地獄に墮ちるよりは、絶対にマシだ。

「なんなりとお申しつけ下さいませ」

俺は手を胸にそえ、うやうやしくお辞儀をする。

「現金な奴」

「世渡り上手ともいう」

キイナが嫌味を言ってきたが軽くスルー。俺の安全が確保された今、キイナなど恐怖の対象ではない。

「何かム力つくから殴っていい？」

やっぱ怖い。物凄くバイオレンスな質問にキイナの危険性を再認識。そんなもの、駄目に決まっている。

「そんなもんぐふっ！」

殴られた。

「お前、許可とつたよな!?　なのになぜ殴る!!」

「優しいあたしは、身構える余裕をあげたのよ」

キイナの優しさは、四捨五入しても1にはならないだろう。

「完全に不意打ちだ!」

女の子のグーパンとか、予想を越える。

「だいたいあんたが悪いんじゃない」

「はあ!？」

キイナは俺が悪いとほざきやがった。まさかの責任転嫁に、俺は呆れ返る。

「あのな、お前、何を根拠にそんなこといってだよ?」

「死因。あたしのせいにしたままでしょ」

まだそんな事言ってるのか。あれは完全に撲殺だろ。

「あれは間違いなく、お前のせいだろ!!」

「あたしのせいじゃない!」

「い、いや、お前のせいだ」

「違う!!　あたしのせいじゃない!　大王さま言ってやって

!!」

キイナは俺との因縁に決着をつけるべく、閻魔大王に話を任せた。死因関係は閻魔大王が把握していると思うので、異論はない。キイナと一緒に閻魔大王を見つめる。

「待て。突然喧嘩を始め、突然話をふられてもわからぬ」

閻魔大王が困った顔をした。しょうがないので、状況説明をする。説明の途中もキイナは嘘を巧に織り交ぜきた。特にあたし襲われた発言には度肝を抜かされた。俺の必死の訂正でなるべく事実に基づいた説明ができたが、少しわかりにくくなっているのではないか心配。

「そうゆうこと」

心配は杞憂だったようで、納得した閻魔大王は、また閻魔帳をどこからか出して、パラパラとめくった。しばらくして、一つのページを開いた。それを俺とキイナに見るといわんばかりに差し出す。

俺はそれを見ようとしたが、キイナに突き飛ばされ尻餅をつく。

「いつてえなあ〜。何しやがー」

「見なさい」

言葉を遮り、見終わった閻魔帳を俺の顔に押し付けるキイナ。

「言われなくても見るっつーの！」

俺はその手から閻魔帳を引いた。一度キイナを睨みつけ、今度は閻魔帳の中を睨む。中にはいろいろな個人情報、役所に出す書類みたいにきっちりグループ分けされていた。

顔写真の丁度下の、死因という欄で目が止まる。そこには少し雑な文字で、「自動車に轢かれて死亡」と書かれていた。あれ……撲殺じゃない。俺の目が無意識に何度も瞬きする。

「何か言う事は？」

当てつけるような声に、俺はギクツ。キイナの顔が正面から見れないような気がする。

「な・に・か・い・う・こ・と・は？」

同じ言葉がとても強調されて聞こえてきた。

「え〜と〜」

少しずつ、少しずつ目を閻魔帳からキイナの方へと向けていく。キイナは笑っていた。ただ笑って立っていた。

すぐに閻魔帳へと目を戻す。恐い。恐すぎる。謝っても許してもえなさそうだ。俺が笑顔に恐怖を覚えたのは久しぶりだ。

目の前の閻魔帳が小刻みにゆれている。それは持つ手が震えているからだ。気付いた時、キイナが動いた。

「分からないなら……体に教えてあげる」

気配だけで分かる。殺意の塊が自分に近付いてきていることが。このままでは殺られる。

実際俺の誤解が招いたトラブルなので、謝らなければならないのは分かっている。でも……物凄く恐い。

頭の中で、罪悪感と恐怖がぶつかり合う。最終的に押し勝ったのは罪悪感。俺が腹をくくって、謝ろうと立ち上がったのと、キイナ

「そして、化け物を退治して欲しい」

はっ？ 何それ。俺は素直に喜ばなくなった。

化け物ってあのお化けとかの化け物の事か。それを退治しろと言
うのだからか。

「別にいいんだがよ……」

何にしても地獄に行くよりはマシだ。だが、ひとつ疑問が残る。

「俺なんかが退治できんのか？」

問題はこれだ。俺はただの高校生。人なら殴り合うので解決出来
るが、相手は化け物。拳で黙らせられる程、やわじゃないだろう。
しかも、実際怪力鬼には敵わなかった。

「失礼な事、考えてない？」

「か、考えてなどおりませんよ」

なんで分かるんだよ！ 女の勘すごいな！

「怪しいわね」

「と、とにかく俺なんかじゃ敵わないだろ」

俺は強引に話を進めた。

「その点は心配せんでもよい」

「なんで？」

「アンデッドになるから、お主も化け物で条件は一緒じゃ」

「あっ、そういう事」

そうだった。俺も化け物になるんだった。正確にはモンスターに。
俺の疑問は簡単に解決した。

「あゝそうそう」

「何かまだあんのか？」

「キイナ」

閻魔大王はキイナを指差す。

「え、何ですか？」

「お主もついていけ」

「「はあ!？」」

俺とキイナは驚愕の声で八もった。

「何であたしがこんな変態についていかなきゃなんないんですか！？」

「なっ、そりゃこっちのセリフだ！！」

「異議は認めん」

閻魔大王の顔に悪戯な笑みが浮かぶ。こいつ……マジでぶん殴りたい。

「意味不明！！」

二人で押し合いながらも、閻魔大王に詰め寄る。

「じゃ〜か〜ら〜」

詰め寄る俺とキイナにため息をする閻魔大王。そしていきなり机を両手をたたき付け、大声で

「異議は認めん！！」

と叫んだ。

びつくりした俺とキイナは一步下がる。

閻魔大王は今度は自分から詰め寄ってきた。

「ということ………いつてらっしやい」

「えっ！？」

また驚愕の声で、キイナとハモった。なぜなら、閻魔大王の手に金棒が握られていたからだ。あれ、一度こんなことあったようない……。金棒は太さが、お祭りなんかによくあるドネルケバブぐらいだ。あんなので殴られたらひとたまりもない。

「一旦落ち着こう。閻魔さん」

「わしは落ち着いておる」

けるつとした顔の閻魔大王。

「じゃあ確認するぞ」

「遺言か？」

「違います。てか、もう死んでる」

「では何じゃ？」

俺は金棒を指差した。

「その手の物は？」

「金棒」

「使用目的は？」

「ぶん殴……人間界に転移させるのじゃ」

「口頭尋問終了。」

「一旦落ち着こう。閻魔さん」

再度俺は閻魔大王を諫める。

「わしは落ち着いておると言っておろう」

「やっぱりこんな感じのやり取り、ちょっと前に体験したことがあるな。」

「人をぶん殴ろうとしてる時点で冷静じゃないだろ」

俺は冷静に、そして慎重に閻魔大王にそう告げる。

「ぶん殴ろうとはしてはおらぬ」

白を切るつもりか。

「いや、してる」

「違う」

「してる」

「そうではない」

「してる」

「偏見じゃ」

「本音を正直に語れば、エロ本をー」

「お主達をボールと見立てて、フルスイングがしたい」

よし、いい子だ。

俺が猥褻な交渉をすると、閻魔大王は勢いよく食いついた。

「さあ、本音を語ったぞ。ブツをくれ」

「まず俺達をボールと同列視しようとしたことを謝れよ」

「すまぬ。わしとしたことが。お主達には、謝っても償いきれない無礼をしてしまった。じゃが許してくれ。悪気はなかったんじゃ……」

……………これでよいか？」

全く以って反省の色が見られない。

「最後ので台なし。よってブツの受け渡しは無し」

「なんじゃと!? おのれ謀りおつたな!」

「自分で墓穴掘っただけじゃねーか!」

「お主、それが目上の者に対する態度か!」

しまった!冷静さを欠いて怒鳴ってしまった。目上かどうかはさておいて、俺は自分の軽率な言動に後悔する。

案の定、閻魔大王の怒りは爆発し金棒を両手で握り直した。

それに危険を感じた俺は少しづつ後ろに下がっていきこうとする。だが逆に前に押し出される。どんなに力をいれても後退できない。ちらつと後ろを見ると、キイナが俺の背中を両手で掴んでいた。さつきから黙つてると思つたら、こいつ俺を楯にしたのか!!

「おい、前に押すな!」

「男だつたら、か弱い女の子を守るのが常識でしょーが!」

「その常識は通用しない! なぜなら、か弱くもないし、まず女の子であるか怪しいからつて痛い痛い痛い!」

「謝りなさい! か弱く、清廉潔白であるあたしに謝りなさい!」

「お前みたいな奴は、世間では強靱で極悪非道と呼ばれる!」

脇腹をちぎれるんじゃないかと思う程、握られながらも俺は屈しない。だがキイナと押し合いしているうちに、時間切れがきてしまった。

閻魔大王が金棒をふり抜いたのだ。

「積年の恨み。ここではらしてくれよう!」

「積年の恨みもくそもあるかぐぶつ!」

俺の言葉は最後まで続かなかった。

冗談は程ほどに。(後書き)

ここまで読んでくださった方々へ

今一度、話を練り直したいので更新を停止させていただきます。
本当にすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9775u/>

俺の命って結構軽い！！

2011年10月3日03時30分発行